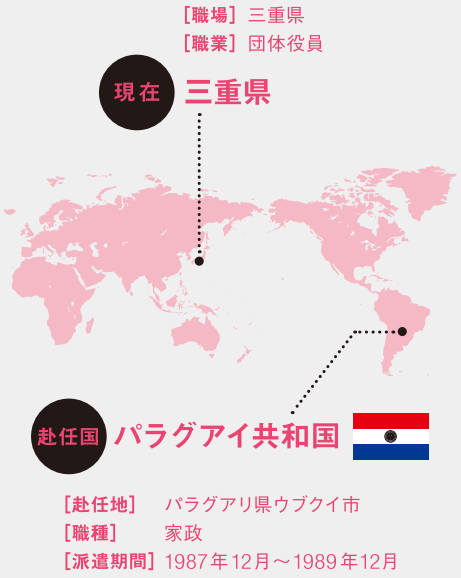

在住外国人の問題解決に尽力しながら「共に住みやすい街」を目指す

菊山 順子さん　NPO法人伊賀の伝丸副代表理事
Junko Kikuyama

言葉は生活の基本。パラグアイでの協力隊時代、住民たちの生活を改善しようと活動する中で身につけたスペイン語を活かし、地元の伊賀市で外国人の相談に対応してきた。今は、未来を担う子どもたちのために何ができるのかを模索しながら、活動を続けている。

家政隊員として パラグアイで幅広く活動

「青年海外協力隊の2年間、苦しくてもスペイン語で頑張り続けることができた。それだけでも大きな収穫でした」

菊山さんが1987年から協力隊で活動したパラグアイは、南米の内陸国で農牧畜が盛んだ。肉中心の食事の偏りから生活習慣病が多く、子どもの肥満度も高かった。栄養士である菊山さんは、隊員仲間と協力し合いながら、周辺の村をまわって、野菜料理の講習会を開いたり栄養指導を行ったりした。初めは野菜料理を敬遠していた人たちも、「美味しい。家でも作ってみよう」と言ってくれるまでになった。また、編み物など手芸の指導をはじめ、小学校では歯磨きなどの衛生指導、農業高校では豆腐など食品加工の指導も行った。

「家政という職種は幅が広く、あちこちに目配りが必要です。気がついた問題点は放っておかない。それが活動を続けるパワーになりました」

地元での共生のために スペイン語を活かす

帰国後もスペイン語を活かした仕事をしたいと思っていた。ちょうどその頃出入国管理法が改正され、名古屋と大阪の中間地点で工場の仕事がたくさんある伊賀市にも、日系の人たちが大勢移り住んできた。現在では人口の6%が在住外国人、小学校でも各クラスに2、3人外国人児童がいる。

菊山さんは教育委員会が募集していたスペイン語の通訳に応募。小学校で外国人児童のための日本語指導クラスを担当することに。1993年には日本語教育を行うボランティア団体「伊賀市日本語の会」を発足。日本語教師ではない菊山さんは、コーディネーター役だ。

最近はメールでの相談や問い合わせも非常に多い。その1つ1つに、知識と経験をもとに工夫を凝らしながら応えていく。

伊賀市内には、活動に賛同し協力してくれる人も多い。

20年間手を携えて進んできた代表の和田さんは、かけがえのない同志。

伊賀市が1995年に立ち上げた国際交流協会の事務局を務めたほか、多国籍料理店「ぽれぽれ家」を経営し、ペルー人たちと南米の民族音楽を演奏するグループを作るなど、協力隊時代と同じように、多彩な活動を繰り広げている。

「食と音楽は受け入れやすいですよね。私の活動はすべて、外国人との交流の中で生まれ、繋がっているんです」

そんな菊山さんのもうひとつの大事な活動の場が、NPO法人「伊賀の伝丸」だ。代表を務める和田京子さんとは、国際交流のための会議で知り合った。

「海外ではとても孤独で、誰にも相談できなかった経験が私にもあります。親兄弟もいない日本で暮らしている外国人が心配でした」と和田さん。二人で「心を伝える」NPO法人を立ち上げ、忍者の里なので「伊賀の伝丸」と名付けた。2019年4月には20年目を迎える。

最初の数年は交流を活動の中心にしていたが、当初の問題意識に立ち返り、現実的な問題解決を優先しようと方向を転換した。

当初の相談は、ビザや医療、会社でのトラブル、生活費など、重い問題が多かった。スペイン語、ポルトガル語、中国語など数か国語での多様な相談に、わずかなスタッフでは補いきれない。団体の運営・経営は本当に大変で、一時はやめようと考えたこともある。でも、現実を目の当たりにすると、続けなければという使命感が湧いてくる。

「通訳や翻訳には神経を遣います。医療関連は命にかかわるし、法律はわかりやすく読み解いてから翻訳しています。学校関係なら先生にわかるよう日本語の対訳をつけるなど、工夫しています」

外国にルーツのある子どもたちにも学びやすい環境を

「今後の課題は子どもたちの教育です。支援を続けてきた外国人の子どもが成人し、社会人になってきた。でも、母国語も日本語も中途半端で学力が伴わず、高校進学がうまくできない子も多い。いろいろなところで、外国人のためのセーフティネットが欠けています」

ここで活躍して、生きてきてよかったと思えるようになってほしい。だから、外国人だけでは難しい部分を、一緒に考え行動する。行政のサポートが行き届かない子どもたちの教育環境をできるだけ整えよう、と活動を移行中だ。

菊山さんはここに住む外国人にとって、お母さんのような存在だ。「改正入管・難民認定法が施行され、外国人はもっと増え続けるでしょう。在住外国人が暮らしやすい寛容な社会は、誰にとっても暮らしやすいと気がつきました。だから、外国人を助けるだけではなく、お互いのために活動しているのだと考えています」

協力隊時代にスペイン語で頑張り抜いたことを思えば、これからも頑張れる。菊山さんはスペイン語を活かし「ますます面白くなる」と言いながら、地元のために前向きに奔走している。

菊山 順子さん プロフィール

三重県出身。大学の家政学部を卒業後、学校栄養士として勤務。青年海外協力隊に現職参加しパラグアイへ。帰国後は、伊賀市でスペイン語通訳、「伊賀日本語の会」代表、多国籍料理店「ぽれぽれ家」経営、南米民族音楽グループ「ワウヘミカンキ」での演奏等。NPO法人「伊賀の伝丸」の立ち上げから参加、副代表理事を務める。

菊山さんへのエール！

NPO法人伊賀の伝丸
代表理事
和田 京子さん

ポジティブな姿勢とグローバルな視点を持つ、大切な仲間

この20年間、一緒に活動してきました。私はリスクを先に考えてしまいますが、菊山さんはやるべきだと思ったら勢いよく推進してくれるので、二人三脚で活動を続けることができました。いつもポジティブな姿勢に、とても助けられています。海外経験があり、グローバルな視点で考えられる人。その力を、地域のために還元し続けてほしい。共に活動していく、本当に大切な仲間です。